

君子危うきに、

「土曜寸言」02.06.29

終電に一本前の身延線車中、車内は、残業帰りのサラリーマンや、一杯きこしめした酔っ払いぐらいで、例によって乗車率40%という程度。4人掛けの座席だが、筆者の前にはピシッとダブルのスーツで決めた地元金融機関のバッジをつけた紳士が一人だけ。通路を隔てて筆者と線対称の位置には、発車のベルと共にあわただしくかけ込んできた男女の高校生一組。

定刻どおりに電車は動き出した。間もなく読書中の筆者の左目の端に不自然な動きが映る。人間の眼球の視野角は200度程度あって、像は不鮮明であるが真横よりも少し後ろ側まで見えるのである。そこは危険がやってくる方角でもあり、動く像に関しては敏感なのだ。

本から目を離してそちらを見て驚いた。件の高校生二人が抱き合っているのである。向かい座席の紳士は、視野角の中心でこれが見える位置にいる。彼はと見ると、憤懣やる方ないという怒気を含んだ目が、夕刊と男女の間を行ったり来たりして定まらない。

丁度そこへ好いタイミングで若い車掌がやって来た。てっきり彼が注意するであろうと期待していると、視線をすばやくはずして現場を通り過ぎ、大急ぎで車掌室に駆け込んでしまった。

空いた電車のこととて数は多くはないが、他の乗客にもこの情景は丸見えだ。どうしているかと思われ

ば、一様に視線を避けて、これを見て見ぬふりをしている。

筆者の義勇心が猛然と奮い立った。

「君たち！、いい加減にしるよ。公衆の面前だぞ！…」

二人は、恨めしそうな顔をしながら離れた。

香山リカ著「若者の法則」(岩波新書)が売れているそうだ。それによれば、電車の中で平気でお化粧をしたり、傍若無人に携帯電話で長話をするのは、実は彼や彼女の目に群集の存在が映らないためであって、周囲が気にならなかつたり、まして無視したりしているためではないのだそうだ。つまり、周囲の他人は、彼らの部屋の使い古した家具調度品と同程度の存在感なのである。

さて、目的の停留所に電車は着いた。同行の紳士も同じ駅で降りるらしく、あの男女に軽蔑のまなざしを放ちながら立ち上がった。切符を受け取ろうとホームに降りた車掌に向かって、紳士は部下に対するように一喝した。

「駄目じゃないか君。ああいう出来の悪い生徒に注意しなくちゃ。不愉快だ！」

車掌は、鳩が豆鉄砲を食らったように目をぱちくりさせた。紳士に向かって、筆者が叫んだ。

「あんたはなぜ黙っていたんだ？！」